

戦後の日韓外来語の通時的対照研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黄,秀智 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000365

2023 年度 国際日本学研究科

博士学位請求論文（要旨）

戦後の日韓外来語の通時的対照研究

国際日本学専攻

黄 秀智

1. 本研究の問題意識と目的

近年、日本と韓国では、技術進歩、経済発展、国際的な交流の増加に伴い、外来語が急速に増加している。日常生活においてはもちろんのこと、テクノロジー、ファッション、食文化といった多岐にわたる領域で外来語の影響がみられる。日本と韓国は地理的にも文化的にも近い関係にあり、西洋から外国語を受け入れ、自国語として使用するという多くの歴史的共通点を持っている。しかし、これらの類似性にもかかわらず、日本語と韓国語の間で外来語の使用率には差があることが言われており、その使用に関しても違いが観察される。例として、日本では、「デパートメントストア」「コンビニエンスストア」「トイレ」といった英語由来の外来語が日常用語として定着しているのに対し、韓国では同等の概念に対して漢語や固有語を用いることが多い（例：百貨店、便宜店、化粧室）。また、日本では外来語が一般的な言語使用において抽象的な概念を持つ語彙として浸透しているのに対し、韓国語においては、このような傾向がそれほど強くない可能性がある。

このような現象は、単純な両国の受容態度の違いの結果だけではなく、言語内的な進化や言語体系における外来語の統合過程の違いによるものかもしれない。受容態度は、確かに外来語の増加に影響を与える一因であるが、それは一部の説明に過ぎない。外来語の使用の差や使用有無の差などの多様な差異は、その他多くの要素、例えば、如何なる外来語が量的にどのように変化してきたのか、両国においてどのような外来語を主に使用しており、文章中でどのような役割を担っているのかといった多くの要素にも影響される。しかし、日本語と韓国語の外来語においてどのような差異が存在し、なぜ生じているのかについてはまだ十分に解明されていない。

そこで、本研究の目的は、日本語と韓国語の新聞コーパスに基づく計量的な分析を行うことで、両言語間の外来語の量的変遷とその差異を解明することと、新聞で見られる外来語の意味用法の比較分析を行い、日韓外来語の特徴を考察することである。

2. 論文の構成ならびに各章の要約

1章 先行研究のまとめと研究課題の設定

- 1.1 本研究の問題意識
- 1.2 先行研究
- 1.3 現状の整理
- 1.4 本研究の目的と課題

2章 日韓新聞コーパス作成と

外来語の語彙調査の手順

- 2.1 日韓のコーパスの現状
- 2.2 新聞コーパス作成における
先行研究の概要
- 2.3 本研究で作成する戦後の新聞データ
- 2.4 2000年以降の日本新聞コーパスの作成
- 2.5 韓国新聞コーパスの作成
- 2.6 語彙分析方法

3章 現代の日韓外来語の特徴

- 3.1 本章の目的
- 3.2 外来語の出現率の比較
- 3.3 高頻度外来語の意味分野の調査
- 3.4 抽象的な意味分野の高頻度外来語
- 3.5 ランクの違いによる類型化
- 3.6 類型別に見る日韓外来語の特徴
- 3.7 まとめ

4章 日韓外来語の量的推移

- 4.1 日韓外来語の量的推移をとらえる観点
- 4.2 外来語の出現率の通時的な比較
- 4.3 日韓外来語の量的推移比較
- 4.4 日韓の外来語受容の歴史的背景とその違い
- 4.5 まとめ

5章 増加傾向から見た日韓外来語の特徴

- 5.1 本章の目的
- 5.2 増加傾向係数の算出
- 5.3 外来語の増加傾向とその意味分野
- 5.4 増加傾向から見た日韓外来語の比較分析
- 5.5 まとめ

6章 類義語と品詞の観点から見た

日韓外来語の特徴

- 6.1 本章の目的
- 6.2 類義語との関係
- 6.3 品詞の特徴
- 6.4 まとめ

7章 終章

- 7.1 各章のまとめ
- 7.2 結論
- 7.3 今後の課題と展望

参考文献

附録-語彙表

1. 先行研究のまとめと研究課題の設定

本章では、研究背景と先行研究、研究目的について述べる。

一般に韓国より日本の方が多様な場面で外来語がより多く使用されていると言われているが、通時的な観点で日韓外来語の相違に注目し、比較分析した研究は見当たらない。そのため、本研究は、日本語と韓国語における外来語の使用の相違を量的および質的な側面から検証し、それらが言語体系内でどのように使用され、どのような相違が見られるのか、また、それらの相違がなぜ生じるのかについて考察することを目指す。

以上の内容を含め、両国における外来語研究の現状を整理し、本研究の目的や課題を明らかにする。

2. 日韓新聞コーパス作成と外来語の語彙調査の手順

本論の最重要要素となるのは、今まで検討されていなかった公的な媒体である新聞コーパスに基づく日韓対照研究である。そのため、10年刻みの1950年から2000年までの毎日新聞を用いて日本語の外来語の基本語化について明らかにした金(2011)の研究方法に従って10年刻みの1945年から2015年までの韓国新聞の『東亜日報』コーパスを構築する。また、2000年以降の日本語の外来語の様相を把握して韓国語のデータと比較するため『毎日新聞 CD データ集』を用いて2000年から2020年までのデータを作成するが、この二つのコーパスの設計、資料の連続性、コーパスの構築方法、データの整備について、ここで詳しく記述する。なお、量的変遷分析のためのテキスト前処理、外来語抽出方法を述べ、日韓の外来語の特徴を把握するための量的分析の方法や用例分析の方法について説明する。

3. 現代の日韓外来語の特徴

本章では、最近の20年を現代と定義し、日韓の外来語使用率の違いを定量化し明示した。現代の日韓外来語の出現率を新聞を通じて分析し、その頻度の違いを明らかにした。さらに、意味分野を整理し、通年度数が高い200語の意味分野の特徴に基づきランク付けと類型化を行った。

その結果、日本語は一般に抽象的な外来語の使用が多いこと、一つの外来語に複数の品詞使用が可能である特徴を捉えた。韓国語では、抽象的な外来語の使用が多いものの、「人間活動」を表す語の使用が多いこと、一つの外来語には一つの品詞を使用すること、類義語の関係により外来語の使用頻度が少ないという特徴を捉えた。

4. 日韓外来語の量的推移

本章では、戦後から現代にかけての外来語の量的推移を詳細に分析し、日韓の外来語の推移には明確な時系列のパターンがあることを明らかにした。また、韓国語の先行研究をまとめ、量的推移と照らし合わせて韓国語の外来語使用背景を整理した。

日本では戦前から外来語の使用が多く、戦後から現代に至るまでその使用率は安定して増加している。一方、韓国では戦後から外来語の使用が急増し、経済発展に伴い使用率が高まったが、日本語の増加率には遅れており、現代でも日本を追い付くことはない。20世紀後半の両国では外来語の急増期と停滞期が類似していたが、現代に入ると韓国語は増加を続ける一方で、日本語は一時的に停滞した後、再び増加傾向に転じた。

5. 増加傾向から見た日韓外来語の特徴

第5章では、20世紀後半の韓国語外来語の出現率と増加傾向係数を算出し、先行研究との比較分析を行い、日韓外来語の増加パターンの違いを明らかにした。分析により、両国の新聞において、外来語の使用は抽象的な意味分野で増加していることが認められた。『分類語彙表』を用いた意味分野の分析からは、日本語では「1.1 抽象的關係」や「1.3 人間活動」といった抽象的な意味を表す外来語が多く見られる一方で、韓国語では「人間活動」を表す語が特に多いことが分かった。また、増加傾向係数の比較分析からは、韓国語において外来語受容の遅れや、外来語より類義語を優

先する傾向があることが明らかになった。特定の分野での韓国語の外来語の増加も確認されたが、日本語の外来語使用には目立った特徴は見られなかった。

6. 類義語と品詞の観点から見た日韓外来語の特徴

6章では、3章および5章で観察された日韓の外来語の特徴を、類義語との関連性および品詞の特徴という二つの観点から分析した。戦後から現代に至る外来語の推移と用例の確認を通じて、外来語の特徴を明らかにした。分析結果から、日本語では外来語が類義語との意味分担をしながら独自の地位を保ち、言語内で定着していく傾向が確認された。対照的に、韓国語では外来語が一時的に使用されるものの、最終的には類義語に回帰する傾向が見られた。また、品詞に関しては、韓国語の外来語は限定された意味で使用され、動詞として使用されるのは希であるのに対し、日本語の外来語は幅広い意味で用いられ、動詞化を含む複数の品詞で使用可能であることが明らかになった。

7. 結論

この研究は、日韓の新聞を通じて外来語の使用とその変遷を量的に分析し、言語間の使用頻度の差異と特徴を明らかにした。1945年から2020年の間の新聞データを基にした分析では、韓国語の外来語使用量が増加しているものの、日本語に比べて約1.3倍弱低いことが確認された。この差異の背景には、韓国における外来語受容の遅れや言語醇化運動、外来語に対する社会的態度が関係している。

外来語の特徴において、日本語では外来語が広範囲にわたる分野で使用され、抽象的な意味分野においても多様な用法が見られる。一方、韓国語では外来語の使用が人間活動に関連する限られた分野に集中しており、類義語を優先する特徴が顕著である。さらに、日本語における外来語は、類義語の意味の一部を担い、その勢力を拡張していくが、韓国語では一時期外来語を使用するとしても、類義語に回帰する傾向が見られる。また、日本語では外来語が名詞や動詞として使用されるのに対して、韓国語では一つの外来語が単一品詞としてのみ使用される傾向がある。このため、韓国語の外来語使用は日本語に比べて拡張性が乏しく、限定的であると言える。

今後の研究では、戦前から現代に至るより長期間にわたる推移の調査や、類義語と外来語の意味分担の具体的な分析、日韓での外来語の受容や定着の仕方、現代における外来語の処理方法など、社会全体の認識の比較分析を通じて、より広範囲かつ深遠な言語変化の理解を目指すことが求められる。